筑紫女学園大学リポジト

『春江花月の夜』覚書

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-02-22 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 松崎, 治之, MATSUZAKI, Haruyuki メールアドレス: 所属:
URL	https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/698

2、聞一多の「春江花月の夜」の評論については、『聞一多全集』③（南通圖書公司出版）の唐詩雑論中の「宮體詩的自贖」の中のものを参照し引用した。

3、高山樗牛の「春江花月の夜」についての評論は、『日本現代文学全集』8（講談社版）中の「月夜の美感に就いて」のものを参照し引用した。

のと受けとめている。

さて、悠久の自然と有限の人との対比での感慨を吐露する場合、月と人のそれが最も普遍的であるが、そのさい月は、秋月であるのが、これまた、人の情緒とのかかわりとしては、有効であることも自明の理であろう。

ところが、この「春江花月の夜」では、春月である。この季節の差異は、どうとらえるべきであろうか。しいていえば、季節を象徴する春花と秋月を、春に両方一緒にとりこんでしまっているところに、この詩の美しい景観がより深められているというべきか、それとも、悠久の自然と有限無常の人との感慨の対比の場合、月は季節に左右されないと把握すべきであるのだろうか。

平成十二年十月七日・脱稿

註

1、歌行体（かこうたい）＝楽府（がふ）の一体。楽府題によく用いられた歌・行・吟・曲・引などを題名に使った作品で、六朝以前の古い楽府にはないものをさす。古詩の体で、おおむね長編。

2、蟬聯体（せんれんたい）＝①せみの声のように連なり続くもの。
②漢詩で、前の句の末の語を受けて下の句を始めるもの。

参考資料

1、「春江花月の夜」については、中国古典文學基本叢書（中華書局）の『楽府詩集』（第二冊）第四十七、清商曲辭四、呉聲歌曲四のものを参照し引用した。

コノ時　相望メドモ相聞カズ
願ハクハ月華ヲ逐ヒ　流レテ君ヲ照ラサナム

そして、次の様に結んでいる。

「過去の世の追憶、遠人の思慕、これ等は月夜の連想としては恐らくは何人も覚えあることならむ。是の連想は、精神全体の沈鬱悲哀なる後景と相応じ、月夜の感慨に一層の深さを加ふるの力あり。もろもろの詠歎は、この連想の絲をたどりて、一種の幽眇なる安慰を吾人に與ふべし。素より観る人の経験、性癖によって、自ら特殊の連想をひき起すべきは言ふまでもなし」と。

そもそも、樗牛といえば、『平家物語』による擬古文体の浪漫的小説「滝口入道」でデビューした作家であるが、みずからこの小説を抒情的叙事詩といっている。その後は、評論活動に終始しているが、やはり、「滝口入道」が、かれの思想の原点であろう。

端的にいえば、日本主義である。だがしかし、その思想の振幅も大きくて、ニーチェに心酔しては、個人主義に傾倒したり、さらに、日蓮への信仰に没頭してもいる。

はたまた、評論に「美的生活を論ず」というのがあって、その要旨は、本能を満足させる生活が美的生活であると論じている。だとすれば、その本能を満足させるものとして、月光によって生じるもの、すなわち陰影礼賛的な美意識による見解が、「春江花月の夜」の詩にマッチしたものであろうか。

「月をながむ」は、古語では月を見つめて物思いにふける意が定着しているが、樗牛の月夜の連想の発言は、それが発想の基盤と思われる。

したがって、初唐の歌行体の詩の中で、粉飾や典故が少なくて、自然詠と叙情詠のバランスがとれている「春江花月の夜」の詩が、樗牛のロマンチシズムというか、耽美主義にきわめてにつかわしくて、妥当な素材であったも

そして、「こは何人も知れる張若虚が詩中の句に非ずや。天地の悠久にして人生の須臾なるを歎ぜるが中に、過去の世の追憶を交へて感慨のうたた永きを覚ゆ」といっている。

○思うに、何人も知れる張若虚が詩といっているが、これは、わが国でも明治時代まで、詩文家たちは常識的に、この詩については知っていたということであろう。

この点について、想起した一例であるが、――明治も末期、自然主義から私小説へ転向した近松秋江の小説「別れたる妻に送る手紙」（明治四十三年）の中で、恋人のお宮が、別れにさいして主人公の私に漢詩を教えてくれとたのむのに対して、「気は進まないながら自分の好な張若虚の『春江花月の夜』を教えて遣った。講釈をして聞せて遣った。『…昨夜間潭夢落花、可憐春半不還家、江水流春去欲盡…』といふ辺は、私だけには大に心遣りのつもりがあった」とある。――最後の「私だけには大に心遣りのつもりがあった」なんて、意味深長なことばで、講釈はどんなものであったか興味をそそるところである。

詩の着眼点でも前述の聞一多のそれと軌を一にするもので、樗牛の見識の高さがしのばれる。

はたまた、「月が、過去の世の追憶に際して最も有力なる媒介者たるは、極めて自然の事なるべし。月によりて遠人を懐慕するの情も同一の起原を有すべし」といって、また、この詩の次の句を列挙している。

誰ガ家ゾ　今夜　扁舟ノ子ハ
何レノ處ニカ相思フ明月ノ樓
憐レムベシ　樓上ニ月徘徊ス
應ニ照ラスベシ　離人ノ粧鏡臺。
玉戸簾中　巻ケドモ去ラズ
擣衣砧上　拂ヘドモマタ來ル

㈠月の光。
㈡月の光に照らされたる夜の世界。
㈢月夜の光景が観者の心にひきおこす連想。

と言って、さらに次のように付記している。それは、「この外にも時と處と、観る人の心とによりて、それぞれの原因あるべけれど、一般に所謂月夜の美感は、右の三要素より成れりと観るを得むか」と。

だとすれば、右の㈠㈡の「月の光」と「月夜の世界」での美感としては、この詩では、「灩灩トシテ波ニ隨フ千萬里」や「月ハ花林ヲ照ラシテ皆霰ニ似タリ」等がそれに相当しよう。

そして㈢の連想については、樗牛は次のように言う。

「連想にもさまざまな種類あり。観る人の性格、閲歴、境遇によりて素より一様ならざるべきも、先ず以て何人の念頭に浮かぶべきは、自然と人生との対比なるべし。此の世にはあるまじき月の光の清らなる、蒼茫たる天空の心ゆくばかり美はしく且つ限りなき、山川の依稀（ほのかなさま）として無言の静寂を保てる、平和のおもかげ、悠久のしるし、何れか現世との好対比に非ざるべき。始なく終なき自然の美はしき大観に面すれば、人生の事業の如何にあはれにも、また見すぼらしく見ゆべきぞ。――

自然と人生との対比に次いで、最も著しき連想は、過去の追想もしくは遠人の懐慕なるべし」と。

こういったあとに、この詩の次の部分を引用している。

江畔何人カ初メテ月ヲ見シヤ
江月何レノ年カ初メテ人ヲ照ラセシ
人生代代　窮マリ已ムコト無ク
江月年年　望ミ相似タリ

これは一段と超絶した宇宙意識であり、一層心うばわれてさびしく、一層もの静かな境地であって、神妙な永劫に直面して、作者（張若虚）には、ただおどろきがあるばかりで、憧憬とか悲傷とかいった気分はない。

なかんずく、「江月年年祇ダ相似タリ、知ラズ江月ノ何人ヲカ待ツヲ」というにいたっては、

他得到的彷彿是一個更神秘的更淵默的微笑、他更迷惘了、然而満足了。

彼（作者）はさながらに、一層神秘な、一層沈黙せる微笑に到達したもので、あきれさまよいながら、深い満足感に満たされているという。

○聞一多の深層心理に対するうがった見識といえよう。

結句の次の四句に対しては、

斜月沈沈藏海霧　　碣石瀟湘無限路
不知乘月幾人歸　　落月摇情滿江樹

這裏一番神秘而又親切的、如夢境的晤談、有的是強烈宇宙意識、被宇宙意識昇華過的純潔的愛情、又由愛情輻射出来的同情心ノ這是詩中的詩、項峯上的頂峯。

この場面が一番神秘的で、また心がこもっている。さながら夢境での面談のようでもある。あるものは、強烈な宇宙意識であり、あるものは、宇宙意識に浄化された純粋な愛情であり、また、あるものは、愛情によって放射された同情心であろうか。これは詩中の詩ともいえるもので、頂上中の絶頂といえよう。

○畢竟、聞一多は最初から最後まで、この詩の内容や展開に対して、嘆賞し傾倒していることは事実である。

第四に、わが国の明治の鬼才といわれる高山樗牛（一八七一―一九〇二）の『月夜の美感に就いて』という論考中での「春江花月の夜」のとらえ方について、ふれておこう。

樗牛は、まず「月夜の美感」の三大要素として、

あると評しているが、宜なるかなである。

第三に、中華民国の詩人聞一多（一八九九―一九四六）は、この詩について、聞一多全集3（南通圖書公司出版部）の『唐詩雑論』中の「宮體詩の自贖」で、わりと詳細に論評している。それは、こうである。

まず、冒頭の次の八句について、

春江潮水連海平　海上明月共潮生
灩灩隨波千萬里　何處春江無月明
江流宛轉遶芳甸　月照花林皆似霰
空裏流霜不覺飛　汀上白沙看不見

在這種詩面前、一切的贊歎是饒舌、幾乎是瀆褻。它超過了一切的宮體詩有多少路程的距離、讀者們自己也知道。

この詩の前では、一切の賛嘆は饒舌にすぎなくて、それは全く冒瀆に近い。そのうえ、長いプロセスをもつ一切の宮体詩を超越しているが、読者自身そのことはよくわかっている。

○この雄大にして、美麗な自然詠に対する聞一多の惚れこみようは、並みではない。

また、次の六句について、

江畔何人初見月　江月何年初照人
人生代代無窮已　江月年年祇相似
不知江月待何人　但見長江送流水

更夐絶的宇宙意識―、一個更深沈、更寥廓更寧静的境界―、在神奇的永恆前面、作者只有錯愕、没有憧憬、没有悲傷。

以上、列挙したものは、当時（初唐）の歌行体の詩の無常をそそる一例であるが、いずれもその部分的なところだけを見ても、調子がよくて、リズムカルである。具体的には、蟬聯体[註2]の筆致が、それを助長していることも確かであろう。

五、

それでは、エピローグとして、この詩に対する評価と、反響（反応）について、付記しておこう。

第一に、総体的な印象批評として、明代の詩人・胡応麟は、『詩藪』の中で、次のように言っている。

「春江花月ノ夜ハ、流暢ニシテ婉転ナルコト、劉希夷ノ白頭翁ノ上ニ出ズ」と。

確かに、この詩は初唐の詩に頻用される典故も少なく、「白頭を悲しむ翁に代る」と、同様なムードをもった詩であるが、その表現法は「白頭翁」ほど華美でもなく、春の夜の情景描写を背景にして、思婦・征夫の心情をおのずと切なるものとしている効果はみごとである。

第二に、明代後期の詩人、鍾惺（一五七四―一六二五）は、評選『唐詩帰』の中で、最初の八句について――

「春江花月夜ノ五字ヲ以テ、一片ノ奇光ヲ錬成ス、真ニ化工ノ手」と、いって、結末の八句については、「初メ花ニ入ッテ軽妙覚エズ（この花は「月ハ花林ヲ照ラス」の句をさす）、後更ニ花ヲ説カズ、唯ダ『昨夜間潭落花ヲ夢ム』ノ一語ヲ帯ブ。妙ハ一夢字ニ在リ。通篇春江月夜四字ノ中、字々是レ花ナルヲ覚ユ。又「揺」ノ字、「満」ノ字ハ幻ニシテ動、之ヲ読ンデ目瞬ク能ハズ」と言っている。

言わずもがなのことであるが、春江月夜の四字は、頻用されているのに、花の字が、最初、「花林」の一語があるだけで、最後に「落花ヲ夢ム」ということで、「春江花月の夜」のテーマを完成させている点、技巧を弄して絶妙で

ったふうに描写されている。

端的に言うと、張若虚の詩には、巧みなレトリックがあるのに対して、李白の詩は、リアルな直叙の筆致である。

はたまた、注目されるのが、時間の流れに対する無常感を強める用法であるが、具現すると、こうである。

前者の場合、

人生代代　窮マリ已ムコト無ク
江月年年　望相似タリ
知ラズ江月　何人ヲカ待ツヲ
但ダ見ル　長江ノ流水ヲ送ルヲ

後者の場合、

今人ハ見ズ　古時ノ月
今月　曽経テ古人ヲ照ラス
古人今人　流水ノ若キモ
共ニ明月ヲ看ルハ　皆此ノ如シ

言うまでもないことであるが、こうした無常感を強める発想は、「月」に関する詩にかぎらず、「花」でもいえる。

「花」を永劫のものとしている劉希夷の七言古詩「白頭を悲しむ翁に代る」の次の句が、それを明示している。

今年花落チテ　顔色改マリ
明年花開イテ　復タ誰カ在ル
年年歳歳　花相似タリ
歳歳年年　人同ジカラズ

古人今人若流水　古人今人流水ノ若キモ
共看明月皆如此　共ニ明月ヲ看ルハ皆此ノ如シ
唯願當歌對酒時　唯ダ願クハ歌ニ当リテ酒ニ対スル時
月光長照金樽裏　月光長ク金樽ノ裏ヲ照ラサンコトヲ

表題からして、酒仙・詩仙といわれた李白らしいものと思われるが、内容も月に対して酔吟し、豪放な気持ちにあふれていて、これまた李白らしい面目躍如たるものである。

実は、詩作の動機として、「故人賈淳、予ヲシテ之ニ問ハシム」と、この詩の李白自身の注にある。つまり、親友の賈淳から「月に問いかけて見ては」とすすめられて、作ったというのである。李白の月へのこだわりを知りつくした親友の卓見といえよう。

ここで、初唐・盛唐の詩に共通する詩境について、比較し検討してみよう。

まず、「春江花月の夜」と「酒を把りて月に問う」二者の中での月の出没の描写の部分を一見すると、

前者は、

「海上ノ明月潮ト共ニ生ズ」
「斜月沈沈トシテ海霧ニ蔵ル」

後者は、

「但ダ見ル　宵ニ海上ヨリ来タルヲ」
「寧ンゾ知ラン曉ニ雲間ニ没スルヲ」

前者は「明月」と「斜月」で、テンスを暗示し、「潮ト共ニ生ズ」「海霧ニ蔵ル」という月の出没の景である。

それに対して、後者は、「宵」と「曉」と、テンスが明示されていて、「海上ヨリ来タル」、「雲間ニ没スル」とい

以上、三十六句のうちの十五句を、一瞥すると、㈠㈡句の昇る月と㈢㈣㈤㈥句の沈む月の対比は、時間の流れを月の移転で暗示している。

一方、㈤㈥㈦㈧の句になると、人と月とのかかわりと同時に、対比された古と今が月という一点において結びあわされて、時間の流れというものに対する無常感を強めるという構成を成立させている。その間に、現在の月の輝きに、普遍的な思婦・征夫の伝説を介在させて、詩の効果を高めようとしていることはあきらかである。

こうした悠久の月と有限な人の対比になる無常の発想は、唐初以来、普遍のもので、それは李白の七言古詩「酒ヲ把リテ月ニ問フ」にも、顕著に見られる。それはこうである。

青天有月來幾時　青天月有リテヨリ来　幾時ゾ
我今停盃一問之　我今　盃ヲ停メテ一タビ之ニ問ハン
人攀明月不可得　人明月ニ攀ズルハ得可カラズ
月行却與人相隨　月ハ行イテ却ッテ人ト相随フ
皎如飛鏡臨丹闕　皎トシテ飛鏡ノ丹闕ニ臨ムガ如キモ
綠煙滅盡清輝發　緑烟滅シ尽シテ清輝発ス
但見宵從海上來　但ダ見ル宵ニ海上ヨリ来タルヲ
寧知曉向雲間沒　寧ンゾ知ラン暁ニ雲間ニ没スルヲ
白兎擣藥秋復春　白兎ハ薬ヲ擣イテ秋復タ春
嫦娥孤棲與誰鄰　嫦娥ハ孤棲シテ誰トカ隣セン
今人不見古時月　今人ハ見ズ　古時ノ月
今月曾經照古人　今月曾経テ古人ヲ照ラセリ

四、

詩中十五回ちりばめられている「月」の字のある句を並列すると、こうである。

(一)海上ノ明月潮ト共ニ生ズ
(二)何レノ処カ春江月明無カラン
(三)月ハ花林ヲ照ラシテ皆霰ニ似タリ
(四)皎皎タリ　空中ノ孤月輪
(五)江畔何人カ初メテ月ヲ見シ
(六)江月何レノ年カ初メテ人ヲ照ラセシ
(七)江月年年　望相似タリ
(八)知ラズ江月何人ヲカ待ツヲ
(九)何レノ処カ相思フ明月ノ楼
(十)憐レム可シ　楼上月徘徊シ
(十一)願ハクバ月華ヲ逐ヒテ流レテ君ヲ照ラサン
(十二)江潭ノ落月　復タ西ニ斜メナリ
(十三)斜月沈沈トシテ海霧ニ蔵ル
(十四)知ラズ月ニ乗ジテ幾人カ帰ル
(十五)落月情ヲ揺ルガシテ江樹ニ満ツ

「月」に季節感はないともいえるが、普通中国でも、日本でも、有名な詩歌では、「秋月」が一般的に把握されている共通な感覚と思われる。

ちなみに、「秋月」といえば、李白の五言古詩・子夜四時歌の秋の詩「子夜呉歌」、あるいは五絶の「静夜思」が、連想されるが、

前者は、「長安一片ノ月、万戸衣ヲ擣ツノ声、秋風吹イテ尽キズ、総ベテ是レ玉関ノ情、何レノ日カ胡虜ヲ平ラゲ、良人遠征ヲ罷メン」と。

言うまでもなく、衣を打ちながら、月に、秋風に、戦地の夫の早い帰りを祈る妻の心を歌ったものである。

後者は、表題の通り「静かな夜のもの思い」であるが、それは、こうである。

「牀前月光ヲ看ル、疑フラクハ是レ地上ノ霜カト、頭ヲ挙ゲテ山月ヲ望ミ、頭ヲ低レテ故郷ヲ思フ」

これまた、実に明白な詩で、秋の夜・美しく輝く月・白一面にさしこむ月の光をみながら、故郷をなつかしむ詩である。

だがしかし、この張若虚のそれは、「春の月」である。「秋の月」には李白の前の二者の詩でもわかるように、寂しい物思いというか、悲しみに通じるそれがあるが、「春月」には、なまめかしくて、華麗なムードがどうしても連想される。

しかも、それに春江・春花と夜の江南の点景となれば、黒と白の色彩のコントラストとしての陰影や幻影が、美観をいっそう増幅させているように思われる。

次に、頻度数の高い、詩中の「春月」の部分をとりだして、その機能について考察し、論述してみよう。

だとすれば、「春江花月の夜」という、なかば駘蕩にして艶麗な印象をかもす自然詠の中に、思婦・征夫の切ない思いを加味した筆法は、決して違和感をおぼえさせるものではなく、当時としては普遍のものとして、かえって心情的には共感を得るものであったと推察される。

とにかく、前半の叙景が美しいだけに、後半の思婦・征夫の抒情がより切実なものとして、人々の心をうつ効果があって、読者を魅了する詩編に完成したのではあるまいか。

蛇足であるが、この耽美的ムードによって描かれている詩の最後に、「碣石」と「瀟湘」という実際存在する地名と河川名をあげて、リアリティにみちた感じを以て一篇を収束しているが、これは後半の抒情の世界を、ひき締めて、効果的であるように思われる。

これまた、余計なことであるが、この詩には、江南の家屋の外見に対する陰影が描かれていない。

隋・唐時代にしても、北と南の風土の違いによる家屋の差異はあったに違いない。現在の北京を中心にした河北一帯と、揚州・蘇州等長江流域では、その相違が歴然としている。

河北は、屋根瓦も壁も土塀も、黄土色、褐色の色合いであるのに、江南は屋根の黒瓦と白壁のコントラストが、くっきりとしていて、それだけで静謐なたたずまいを感じさせる。おそらく、張若虚の脳裏にも、江南江辺の家屋の陰影が去来していたと思われる。

確かに、江南の風土や地域性からいっても、夜の春江・春月・春花は、美しさ・神秘性をかもす風物であろう。しかし、この詩では、具象化されていない家屋・小舟・虫の音等も付加価値のものとして、イメージしてしまうほど、陶酔させる詩境の詩であるということを強調しておきたい。

さらに、全篇にわたっての「月」の頻出度の多量さが、春の夜の美しいムードをかもし、ひいては、思婦・征夫の甘く切ない情緒を生みだす由縁でもあるが、その「月」について一言ふれておこう。

婦・征夫への思いやりが、「春江花月の夜」という駘蕩としたムードの中で、あまりにも対照的であるがゆえに、より強調したかったのではないかとさえ思われる。

その具体的な証しとして、(九)解の二句と三句目、「碣石、瀟湘限リ無キノ路、知ラズ月ニ乗ジテ幾人カ帰ル」の詩句は、唐突にもリアルな感じを与えるが、これは当時の官吏や商人の生活実態を示唆するものであろう。

というのは、碣石は河北省の地名で、ここでは、中国の北の涯を代表させていて、瀟湘は湖南省を南から北へ流れる二本の川の名であるが、これは中国の南の涯を代表させていると考えられる。

したがって、当時国内で碣石と瀟湘の間は、旅程として、最長距離のコースであった。そこを旅するというのであるから、「限リ無キノ路」となるわけである。しかも当時は、官吏になるにも商人になるにも自分の郷土ではなれないといった不文律みたいな慣習さえあった。

思うに、こうした社会体制が、おのずと思婦・征夫を生みだしてもいたと考えられる。

してみると、当時、こうした実例は天下いたるところで見られたわけである。

この点を立証するものとして、官吏の流転の生活実態を暗示した、初唐・王勃の「杜少府　任ニ蜀州ニ之ク」という五律の送別詩が思いおこされる。それは頷聯の詩句であって、こうである。

與君離別意　　君ト離別ノ意
同是宦遊人　　同ジク是レ宦遊ノ人

君と別れる悲しさも、互いに仕官の身であれば、会っては離れるのもやむを得ぬさだめであろうという。官吏の世界では、友人との離別なんて普遍的な事象であるから、仕方がないといった思いである。思婦・征夫の哀感に比べると、友との離別を思うといった変形ではあるものの、生別離の実態が、このように身近かに散在していたことも事実である。

結纜隱梅洲　纜ヲ結ビテ梅洲ニ隱ス
月色含江樹　月色江樹ヲ含ミ
花影覆船樓　花影船樓ヲ覆フ

○これまた、張若虚の「春江花月の夜」の自然詠の部分に、描写法も雰囲気も投影されていることは明白である。特に三句目の「月色江樹ヲ含ミ」と、張若虚の結句、「落月情ヲ揺ルガシテ江樹ニ満ツ」の「江樹ヲ含ミ（つつみこむ）」と、「江樹ニ満ツ（いっぱい光をふりそそぐ）」の陰影のコントラストは印象的である。

畢竟するに、煬帝、諸葛穎いずれも短詩形であるが、わずか三十年ぐらいで滅びていく隋という不安定な世相の中で、自然の美感に没頭することで、そこに慰安を求めたふしもある。

それに対して、初唐の張若虚は、己の不遇による哀愁の中で、同情し共鳴できたのであろう。それがひいては、先行詩である二者の自然詠に魅了されて、詩作の着想となったと考えられる。

というのも、その描写法の雄大さと、華麗さから生じる美感は、いずれも前二者の詩のそれを敷衍したところの産物といっても過言ではなかろうと思われるからである。

ここで、張若虚が詩の後半に、幻想的に思婦・征夫の哀愁を付加していることについて、ふれておこう。

思うに、思婦のなげきや征夫の望郷の念をうたいあげた詩は、『詩経』以来、放挙にいとまがない。

なかでも、後漢中期の制作とされる『文選』中の「古詩十九首」のそれは顕著である。

十九首のうち十首が、思婦・征夫の哀感を切々と訴えたものである。

南朝・梁の蕭統が当時までの詩文のすぐれたものを、選び集めたといわれる『文選』中でも「古詩十九首」は、作者不明の五言の詩編であるが、傑出した名品として、それ以来士大夫の必読の詩であった。

小役人として不遇であった張若虚の空想・幻想は身につまされるものとして、生別離という悲哀の立場にある思

湘川値兩妃　　湘川ニテ両妃ニ値フ

夜露には花の香が含まれていて、春の川の淵には、月影がただよって流れているのを見ていると、そばに侍る美女達は、さながら漢水のほとりで『詩経』周南の漢広篇に見られる遊女たちにあっているようであり、はたまた、湘水のほとりで、神女となった舜帝の両妃にでも会っているかのような気がするという。

○前の二句は、春の花を露の香気に匂わせることで、花の咲き乱れたさまを連想させ、ただよう月影によって、春の川の流れを点出しているが、この二句は、前㈠首同様、江南の春江花月の夜の叙景をよりディテールに描写している。

だがしかし、後の二句になると、現実のものを幻想・空想の世界に誘いこんで、楽しんでいる感がある。

というのは、自分（煬帝）に侍っている美女達を見て『詩経』、『楚辞』に登場する遊女・神女のロマンチックな世界に心を遊ばせているということである。

つまり、煬帝は自分に仕えている寵姫たちを、物語りの中の女性と化して詠じている。

張若虚の場合の空想は、普遍的な思婦・征夫のなげきや哀愁であったのに比べて、煬帝のそれは、『詩経』、『楚辞』といった古代のアンソロジー中の遊女・神女への憧憬といった皇帝らしい嗜好が反映されている。

とはいうものの、二者いずれも実景のムードに触発されての空想・幻想であって、自然と人と神秘的な世界とが渾然一体となっている中での産物である点では、全く軌を一にするものである。

また、江南の地・揚州あたりの春の夜の大きい川、花、月等の自然詠が、陰影に富んでいるという筆致も同じ詩趣といえよう。

次に、隋の諸葛穎の楽府一首、五言四句のものは、こうである。

花帆渡柳浦　　花帆ハ柳浦ヲ渡リ

(一)暮江平不動　暮江平カニシテ動カズ
春花満正開　春花満チテ正ニ開ク
流波將月去　流波ハ月ヲ将チテ去リ
潮水帶星來　潮水ハ星ヲ帯ビテ来ル

パラフレーズする必要もないが、――夕暮の満ち潮で川は平かで流れず、春の花は枝いっぱいに今を盛りと咲いていて、静かなひとときである。

川面に映える月影を、流れる波が持ち去るかと思うと、海が近いので、潮がきらめく星とともに満ちてくる。

○短い詩形であるが、無限な空間が、静寂の中に動く風物を中心にすえて描出されている。

具現すると、春の川・春の花の静寂と、波と潮の動き、それに月と星との美しい光、これら三者が渾然一体となり、不可分に関連した世界を作りだしている雄大な自然詠である。

さて、張若虚の(一)解から(四)解までの十六句に見える自然詠は、おそらく煬帝のこの(一)首の詩境を敷衍したものであろう。

煬帝は、父文帝が着手していた運河を最大限に生かして、さらに長安と揚州とをつないで、南から北への物資輸送の便宜をはかったが、その史的な功績は大きいといわれている。

したがって、そういう事情を勘案すると、この詩は、煬帝の豪華な船旅における揚州あたりが、この場景であろうか。第二首も同様、五言四句の古体詩であるが、それはこうである。

(二)夜露含花氣　夜露ハ花気ヲ含ミ
春潭濃月暉　春潭ハ月暉ヲ濃ハス
漢水逢遊女　漢水ニテ遊女ニ逢ヒ

興味深いものである。

総括として、この詩の展開法を、再度具体的に整理しておこう。

まず、㈠解と㈡解の八句では、春江（大きい川）の状況から歌いおこし、次に夜の月を詠（えい）じ、さらに花咲く林を点描して、春江花月の夜という表題を言いおこしている。

次の㈢解、㈣解では、月に触発されて人世の流転、悠久なる自然への思いが吐露され、㈤解では、前の二句で月明の夜の情景と、その江月に対する感慨となり、後の二句で、後半のモチーフとなっている思婦・征夫の悲哀を言いおこしている。

㈥解、㈦解ではこれを受けて、思婦のなげきの描写となり、最後の㈧解と㈨解では、征夫の哀愁が、落花、行（ゆ）く春、沈む月といった自然の推移を媒体としてうたいおさめられている。

思うに、その展開たるや、実に明解な論法であるが、後半の㈥、㈦、㈧、㈨解で、思婦のなげきと征夫の望郷の哀感をからませているのは、明らかに春夜の景に触発されてそえられたもので、詩のテーマは春江花月の夜の自然美を描くことであったろう。

それでは、次に、この詩とかかわりのある隋の煬帝（ようだい）と同じ隋の諸葛穎の楽府詩との比較を試（こころ）み、詩の着想にせまってみたいと思っている。

三、

『楽府詩集』巻第四十七、清商曲辞四、呉声歌曲四の巻頭にある「春江花月の夜」二首（五言四句）、隋の煬帝の詩は、こうである。

さて、この詩を読解し、鑑賞するたびに、初唐という建国以来、ほぼ一世紀にわたる間の詩にしては、魏徴の「述懐」のような、意気軒高なムードというか、おとこ気、気迫にみちた時代相にふさわしい作品が少なく、かえって、この「春江花月の夜」や、盧照鄰（六四〇―六八〇）の「長安古意」、駱賓王（六五〇―六八四）の「帝京篇」、劉希夷（六五一―六七八）の「公子行」、「白頭を悲しむ翁に代る」、衛萬の「呉宮怨」等、孤独と哀愁にみちた作品が多い。

いずれも、『唐詩選』にも記載されている七言古詩の名品である。具体的に各作品の主旨を要約すると、こうである。

「長安古意」は、栄華も忽ち滅び去る浮き世の推移の中で、不遇な寂寥に生きる己を描いている。

「帝京篇」は、栄華も結局は、はかないものであるといい、同時に、己の不遇な宿命を慨嘆している。

「公子行」は、人生のはかなさを歌い、「長安古意」と、その趣きが似かよっている。

「白頭を悲しむ翁に代る」は、人間の衰えやすいことを嘆いている。

「呉宮怨」では、栄枯盛衰、今昔の感を詠っている。

つくづく、何故かといいたい。唐の建国というはつらつとした時代相であるはずなのに、時代精神に逆行しているのではないかということである。

それとも、建国期でも、滅びた前代隋に対する余音というか、感慨が緒を引いていることによるものか。

はたまた、まだ世相に不安定なところがあって、安定させる過程で、不遇な人をかえって量産させていったという経緯の中で、こうした負（マイナス）の精神現象の詩群を生みだすことになったのか。

不遇であったからこそ、それが原動力となって、名作を生みだしたのだとわりきれば、それまでであるが、それにしても、建国という進取的であるはずの時代精神とは、対照的な詩想をかもす由縁は那辺にあるかということは

○最後の四句であるが、「斜月沈沈海霧ニ蔵レ」と、大海原の夜霧にひっそりとかくれ沈んで行く月は、㈠解の大海原の上に、さし潮とともに昇って行く「海上ノ明月潮ト共ニ生ズ」と、呼応してひびきあっている。

しかも、㈠解の雄大な景観に対して、㈨解は、静寂な終幕である。それは、㈠解は月が昇ってくる叙景のみであることも、春月の雄大さが、もろに感じられる所以であるが、このエピローグの月は、沈み行く月というイメージとしては弱体化したものといった感じで、それに人とのかかわりが重く作用している点が、さらに静寂な印象を与えているといえよう。

なかんずく、結句の「落月情ヲ揺ガシテ江樹ニ満ツ」にいたっては、この詩全体の情と景を集大成しているといっても過言ではなく、「春江花月の夜」の詩趣と魅力を象徴していると思われる。

とにかく、詩は月が昇ってから沈むまでの限られた一時の中で、夜の春江花月といった叙景をライトモチーフとして、思婦と征夫の心情を加味して、人世に対する深い感慨をもうたいあげているといった体裁である。

「春江花月の夜」なんて表題からして、五文字そのまま一つの絵のようで、優美にして華麗な印象を与えるが、美しい詩であることはまちがいない。そのうえ、この詩には、初唐の歌行体の詩にありがちな、典故の頻用がないことが、かえって、リズムの流暢さを助長しているといえよう。

はたまた、ディテールなことであるが、「春」の字を四回、「江」の字を十二回、「花」の字を二回、「月」の字を十五回、「夜」の字を二回といった具合に描出して、これら五文字をうまく照応させながら、詩を展開させているところに、美しさの由縁があると同時に、ひいては対照的な思婦・征夫の切なさがクローズアップされ、しみじみとした情緒をかもしている。

さらに、「春月」の十五回の点描が、やはり、この詩の陰影というか、一つのムードをつくりあげているが、それにしては、表現に粉飾が希薄である。それがまた、思婦・征夫の哀感を浮き彫りにする効果をあげている。

○前(六)・(七)解では、思婦の思慕と嗟嘆が、月光のもと、砧の音、雁や魚にまつわる故事（便りを届ける）までとりあげて、吐露されていたのに対して、この解は、逆に征夫の望郷の念が、落花、行く春、落月の事象を通して歌いあげられている。

思うに、(二)解の花林は、月が照らしている妖婉ささえ感じられるそれであったのに、この解での花は、対照的に落花であり、しかも夢の世界での花である。また、月も川の淵に落ちかかる月という。(一)解で、潮とともに海上より昇った月が、やがて、(三)解では、空中の孤月輪となり、(六)解では、楼上を徘徊した月であったのが、この(八)解では、淵に落ちかかる月となってしまった。

したがって、この落花の夢と時の推移を象徴している落月は、征夫の旅愁と望郷の念切なることを、一段と強調する効果へと連動している。

旅先での春の夜半の夢が、落花であるということは、妖艶さの中に、哀感をそそる情念がひとしおであることを示唆するものでもある。

(九)斜月沈沈藏海霧　斜月沈沈トシテ海霧ニ蔵レ
　　碣石瀟湘無限路　　碣石瀟湘限リ無キノ路
　　不知乗月幾人歸　　知ラズ月ニ乗ジテ幾人カ帰ル
　　落月揺情滿江樹　　落月情ヲ揺ルガシテ江樹ニ満ツ
（押韻は去声御韻）

やがて、傾いた月は、ひっそりと海上にたちこめる霧の中にかくれて行く。ああ北は碣石から、南は瀟湘のあたりまで、はてしない旅路が続くが、この月の光のもとで、なつかしい故郷へ帰ることのできる人は、果して何人いることだろうか。沈み行く月は、人の心を揺り動かしながら、川辺の樹々いっぱいに光をふりそそいでいる。

（押韻は平声文韻）

今、この時、あの人のいる方を遠く眺めても便りを交わすよすがもない。――できるなら月の光を追いかけて、ともに流れて、いとしいあの人を照らしたい。

折しも、便りを届けてくれるという雁が、はるか遠くへと飛んで行くが、楼前の月光をあの人のところまで運んではくれないし、一方、魚や龍は水中深くはねおどって、水面に波を立てるが、消息を伝えてくれるという魚も思いを伝えに行ってはくれない。

○この解は明らかに、前の(六)解の詩境を受けて、旅にある夫を思慕する妻の口吻がもらされている。さらに、便りを届けるという故事、典故をもつ天の雁、江の魚とのコントラストな視点での技巧まで駆使して、叙情的叙事の世界を空想して、読者を物語りの情念へとさそいこむ手法とさえ感じられる。

前の(六)解と、この(七)解は、春夜の月光の陰影が、思婦の情念を助長する役割をはたして、実景が希薄になった感じであるが、それがかえって、空想・幻想のカテゴリーを増幅し、豊かにしている。

(八)昨夜閑潭夢落花　昨夜閑潭　落花ヲ夢ム
可憐春半不還家　憐レム可シ春半ニシテ家ニ還ラズ
江水流春去欲盡　江水春ヲ流シテ去ツテ尽キント欲ス
江潭落月復西斜　江潭ノ落月　復タ西ニ斜メナリ

（押韻は平声麻韻）

昨夜、わたしは静かな淵のほとりに、舟泊りしたが、夜半にはらはらと花が散る夢を見た。ああ、春ももう半ばだというのに、まだ家には帰れず漂泊の身である。流れてやまぬ水は、春を流して、春も終わろうとしているのに、見れば川の淵に落ちかかろうとする月も、いつかもう西に傾いてしまった。

悲嘆余哀有リ」という詩境をふまえていることは、あきらかである。

したがって、この二句を契機として、自然詠に人の情愛のあわれさを加味し、情緒纏綿の詩趣へと傾斜していく。はたまた、この征夫・思婦の哀感をさそう筆致は、『文選』の古詩十九首にみられる底流感情と軌を一にするものである。

(六)可憐樓上月徘徊　　憐レム可シ楼上月徘徊シ
　應照離人粧鏡臺　　応ニ照ラスベシ離人ノ粧鏡台
　玉戸簾中卷不去　　玉戸簾中巻ケドモ去ラズ
　擣衣砧上拂還來　　擣衣砧上払ヘドモ還タ来タル

（押韻は平声灰韻）

あわれ、高殿には、月影がゆれ動き、きっと夫と別れて暮らしている妻の化粧に使う鏡台を照らしていることであろう。一方、閨の玉の飾りを施した戸口のすだれの中に、その月光を巻きこんでしまおうとしても、巻き収めてしまうこともできず、また夫に送る着物を打つ砧の上には、払えども払えども月の光が、なおさしてくる。

○ついに、春江花月の夜景に誘われた情念として、「離人（夫と離れてひとり留守居をしている妻）ノ粧鏡台」、閨の「玉戸簾中」、それに「擣衣砧上」等と、思婦の情が、月光を媒体としてライトアップされている。とにかく、離人の旅にある夫への思いと、それを暗示する行為が、具象化されて、ひとしお哀愁がただよう。

(七)此時相望不相聞　　此ノ時相望メドモ相聞カズ
　願逐月華流照君　　願ハクバ月華ヲ逐ウテ流レテ君ヲ照ラサン
　鴻雁長飛光不度　　鴻雁長ク飛ンデ光度ラズ
　魚龍潛躍水成文　　魚龍潛躍シテ水文ヲ成ス

江月年年望相似　江月年年望ミ相似タリ
不知江月待何人　知ラズ江月何人ヲカ待ツ
但見長江送流水　但ダ見ル長江ノ流水ヲ送ルヲ

（押韻は上声紙韻）

人間の生涯は、世代から世代へと、交替して移り変るが、この江上の月ばかりは、毎年毎年その眺めに変りはなく、常住不変の姿を見せている。そしてその月は、いったい誰を待っているのか、知るよしもないが、ただ眼前には、無情にすぎ行く時の流れさながらに、長江の水が、ひたすらに流れてやまぬのを見るばかりである。

○ここで無常の人の生涯と永劫の月と長江の流れに思いを致しているかに見えるが、そこには、現実直視の中での人と自然のいとなみの落差の大きさへの驚嘆がある。

(五)白雲一片去悠悠　白雲一片去ッテ悠悠
青楓浦上不勝愁　青楓浦上愁ヒニ勝ヘズ
誰家今夜扁舟子　誰家ゾ今夜扁舟ノ子
何處相思明月樓　何レノ処カ相思フ明月ノ楼

（押韻は平声尤韻）

空を仰げば、ひとひらの白雲が、ゆったりと流れて行くが、青い楓の茂る入江では、孤客が、たえがたい愁いにつつまれる。今夜、どこの誰かは知らないが、この入江に小舟を浮かべているが、この旅人のことを思っている女性が、どこかの高殿でこの明月を眺めては、嘆いているのではあるまいか。

○「今夜扁舟ノ子」と「相思フ明月ノ楼」で、征夫・思婦の情念を分明に言いおこしているが、なかんずく、「相思フ明月ノ楼」は、三国・魏の曹植の「七哀詩」に、――「明月高楼ヲ照ラシ、流光正ニ徘徊ス。上ニ愁思ノ婦有リ、

汀上白沙看不見　　汀上ノ白沙ハ看レドモ見エズ

（押韻は去声霰韻）

川の流れはうねうねと、花かおる野辺をめぐり、月が花咲く林を照らせば、花は白く光り、一つ一つが、さながら霰が降ったよう。月の光の白さにまぎれて、空中を飛ぶ霜も、さっぱり目にもとまらない。渚の白砂も、白く映えていずれが砂か月影か見分けもつかぬ。

○春の夜の花かおる野辺、花咲く林、さながら霰のよう、空中を流れる霜、渚の白砂等と月影を媒体として、上・下のコントラストの描写が駆使されているが、その絵画的・幻想的な景物は、うっとりさせるものがある。それにしても、綺麗というか、ファンタスティックな世界にすいこまれるといった感じである。

(三)江天一色無纖塵　　江天一色纖塵無ク

皎皎空中孤月輪　　皎皎タリ空中ノ孤月輪

江畔何人初見月　　江畔何人カ初メテ月ヲ見シ

江月何年初照人　　江月何レノ年カ初メテ人ヲ照ラセシ

（押韻は平声真韻）

川も空も一色に澄みわたって、微塵の塵もなく、冴え渡って輝くのは、大空に浮かぶただ一つの月ばかり。思えば、この川辺で初めて月を見たのは、いったいどんな人だったのだろうか。また、この川辺の月が、初めて人を照らしたのは、いつのことだったのだろうか。

○江天一色の月夜の景を描写しているが、清らかな月も、孤影悄然、ここで月と人とのかかわりの感慨を惹起しているが、これまた、自然なタッチと思われる。

(四)人生代代無窮已　　人生代代窮マリ已ムコト無ク

四、唐の張若虚の七言三十六句の一首

五、唐の温庭筠の七言二十句の一首

以上、五人の詩を一見するに、張若虚の作品が長篇ということもあろうが、内容外観ともに、艶美な表題そのままのムードをあますところなく発揮していて、異彩を放っていることは確かである。

前置きはこのくらいにして、三十六句からなる作品そのものを、韻が四句ごとに九回換韻されているのにもとづいて、四句ずつ記載して、主に修辞と内容を検討する資としよう。

(一)春江潮水連海平　春江ノ潮水海ニ連ナッテ平カナリ
海上明月共潮生　海上ノ明月潮ト共ニ生ズ
灩灩隨波千萬里　灩灩トシテ波ニ随フ千万里
何處春江無月明　何レノ処カ春江月明無カラン

（押韻は平声庚韻）

長江の春の潮は、遠く海にまで続くかのようにみなぎり平らかである。折しも明月が満ちてくる潮と共にさしのぼってきたかと思うと、きらきらと金波銀波がゆらめいて、千里万里のかなたまでひろがって、この春江のどこにも、月光の照らさぬところはない。

○大潮のさす長江上に満月の昇り出たことから歌いおこす景観の雄大さとともに、独特のリズムをうみだしている流麗な詩句は、春の夜の月明の光景を色あざやかな美しさの中に、陰影に富む表情まで感じさせる。

(二)江流宛轉遶芳甸　江流宛転トシテ芳甸ヲ遶リ
月照花林皆似霰　月ハ花林ヲ照ラシテ皆霰ニ似タリ
空裏流霜不覺飛　空裏ノ流霜ハ飛ブヲ覚エズ

『呉中の四士』と、いわれた」というから、今の江蘇省（呉中・江南地方）一帯では、多少の名声はあったようだ。

また、唐の鄭処誨の『明皇雑録』には、―「天宝ノ末、劉希夷・王冷然・王昌齢・祖詠・張若虚・張子容・孟浩然等、文章ノ盛名有リト雖モ、皆流落シテ不遇ナリ」と、あるところからすると、どうも開元・天宝期の下積みの役人にすぎず、不遇であったように思われる。

次に詩「春江花月の夜」の文学史上の位置づけはどうかということになると、盧照鄰の「長安古意」、駱賓王の「帝京篇」、劉希夷の「公子行」及び「白頭を悲しむ翁に代る」等の詩とともに、唐初における七言歌行体の名品の一篇であろう。

ところで、「春江花月の夜」という表題は、五文字そのままが一つの絵のような印象を与えるが、実は楽府題であって『楽府詩集』巻第四十七・清商曲辞四・呉聲歌曲四中の一つである。

『旧唐書』音楽志によれば―「南朝最後の天子である陳の後主陳叔宝は常に宮中の女楽士や朝臣たちと相唱和して詩を作ったが、その歌詞の中から、太常令（楽官長）の何胥が、最も艶麗なものを採って、この曲を作った」という。今は散逸して見られないが、張若虚は、この題をかりて、それにならって作ったものである。同時代の詩人張子容にも、同題の詩二首があるが、これはいずれも五言六句の短詩形であるのに比べて、張若虚のそれは三十六句からなる長篇詩である。

『楽府詩集』巻第四十七中の『春江花月の夜』の題で作られている詩は、全部で七首である。ちなみに、列挙するとこうである。

一、隋の煬帝の五言四句の二首

二、隋の諸葛穎の五言四句の一首

三、唐の張子容の五言六句の二首

ところで、今回はこの張若虚の「春江花月の夜」について、その詩境及び詩情について鑑賞し、考察してみようと思っている。

詩作の環境・全景については、張若虚の出生地、揚州（江蘇省江都県付近）あたりの長江下流の場景を詠んだものと考えて、そうまちがいではなかろう。

してみると、江東・江南の地で長江を中心にすえた月夜の静寂（しじま）の風光が、実景といったところであろうか。

したがって、テーマは、春の長江の辺（ほとり）に咲き乱れる花に、明月が照りはえる夜景の自然美を描くことが、ライトモチーフであって、それに旅にある夫と、留守居の妻女との相思の情をからませて詠じたところに、その思婦のなげきと征夫の望郷の哀愁が、落花、行く春、沈む月等を媒体として、甘く切ないムードをつくりあげ、その流麗なリズムもてつだって、一種の神秘的な美感をかもしている詩といったものであろう。

秋を象徴する秋月ではなく、春月であるところに、叙景も静寂さの中に、温暖の地江南のなまめいた美しさを加味している。そこが、この詩の独自な点であると同時に、人々を魅了する要素であろう。

とにかく、甘く切ない情緒と行文流麗なリズムは、何度読んでも、こころよいが、その由来は那辺（なへん）にあるか、江南の風土性も考慮して、論述したいと思っている。

二、

張若虚（ちょうじゃくきょ）（六六〇？―七二〇？）は揚州の人で、兗州（えんしゅう）の兵曹（兵事を掌（つかさど）る役人）になったというが、生卒も事蹟もはっきりしない。

『旧唐書』巻一百九十中の「賀知章伝」に、――「開元年間（七一四―七四一）、賀知章（がちしょう）、張旭（ちょうきょく）、包融（ほうゆう）等とともに

年が改まって春になれば、人はそぞろに心が楽しくなり、草木が茂る夏になれば、人の心はむすぼれふさがり、天高く澄む秋になれば、人は物思いにふけり、霜雪の冬ともなれば、身がひきしまり厳粛な思いとなる。それぞれの季節には、それぞれの風物があり、その風物によって移り変わる人の感情が、詩や文となってあらわれる……」とも、言っている。

こうしたプロセスを経て、花鳥風月は四世紀以来、詩とは切りはなせぬものとなり、詩人は自然を愛して、その中に自分を没入させようとしていった。それも究極的には煩わしい人の世をのがれ、静謐な自然を楽しもうという魂胆からであったと思われる。

したがって、それとひきかえに孤独の影がつきまとうのは、詩人として致し方のない自得のようなものであったろうか。そして、そうした果てに産出した詩が、初唐の一時期に、歌行体(註1)の様式で、のこされているが、その切ない情緒と流麗な調べの中にただよう哀愁は、こころよさと、レトリックの美しさの点で、至極の世界をつくりあげている。

そのティピカルなものが、劉希夷の「白頭を悲しむ翁に代る」と、張若虚の「春江花月の夜」の二篇で、いずれも『唐詩選』の七言古詩の巻首を飾るものとして、相応しい詩篇である。

この二人は、この二首の詩によって後世まで名を馳せることになった点で共通している。

はたまた、ユニークな点では、前者の詩中に見られる「年年歳歳花相似タリ、歳歳年年人同ジカラズ」の句は、舅の宋之問がほれこんで譲ってくれといったが、譲らなかったので、これを憎み、奴僕に圧殺させたという怪しい伝説が生まれるくらい有名である。

後者、張若虚の詩で、現在存在するものは、この詩のほかに、『全唐詩』に一首あるばかりで、わずか二篇の詩中、この「春江花月の夜」一篇によって、その名が後世に伝わったという詩人冥利に尽きるといった存在である。

る。それは、こうである。

春花秋月何時了　　春花秋月何レノ時ニカ了ラン
往事知多少　　往事知ンヌ多少ゾ
小樓昨夜又東風　　小楼昨夜又東風
故國不堪回首月明中　　故国首ヲ回ラスニ堪エズ、月明ノ中

春の花、秋の月、季節ごとのよいながめは、いつになっても尽きない。それにひきかえ、人間界では、昔からいったいどれほどのことが起こり消えていったことかと。――この「虞美人」という詞からは、後主の悲哀と絶望感がため息のように聞こえてくる。

だがしかし、「春花」と「秋月」のように、自然の季節に応じるものを美として詠ずることは、古代中国の『詩経』には、まだ見られない。『詩経』国風にも、確かに日・月・花・草・鳥等、うたわれたものは多々あるが、それらは自然詠ではなく、皆、人々の愛情や戦争や一族の繁栄や、現実の喜怒哀楽を歌いだすための比喩として使われていたにすぎなかった。つまり、『詩経』の「比」、「興」の表現法の素材が、それである。

したがって、自然の風物をそのまま美として歌いあげることは、それから約一五〇〇年後の六朝時代からであろう。

確たる証として、南朝梁の鍾嶸が、『詩品』の序で、「春風春鳥、夏雲暑雨、秋月秋蟬、冬月祁寒等、これらはみな四季が詩の感興を呼び起こす題材である」と、言っている。

また、同じ梁の劉勰（？―五二〇）が、『文心雕龍』の中で、「春が去れば、秋が来て、四季が、たがいに交代する中で、陽の気は人の心を明るくし、陰の気は人の心を暗く沈ませる。つまり、自然の変化推移に応じて人の心もまた動揺する。

『春江花月の夜』覚書

松崎治之

A Note on a Poem Depicting Riverbank Flowers on a Moonlit Spring Night

Haruyuki MATSUZAKI

一、

二〇〇〇年の立秋とは名のみで、残暑厳しい毎日であった。でも、さすがに九月も半ばともなると、風と冴えた月影が、秋という季節を、そぞろに感じさせてくれる。

「秋來ぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞ驚かれぬる」（古今和歌集・巻第四秋歌上・藤原敏行朝臣）の歌意を今年ほど分明に実感させられたことはなかった。

はたまた、月となると、

「月見ればちぢに物こそ悲しけれ、わが身ひとつの秋にはあらねど」（古今和歌集・巻第四秋歌上・大江千里）の歌が、おのずと連想されるが、寄る年波の感傷であろうか。

秋の季節感を象徴するものが、中国でも「月」であることは、ほぼ当を得たものであろう。

それにつけて、思い起こされるのが、五代南唐の後主李煜（九三七―九七八）が、宋の太祖（趙匡胤）に国を亡ぼされ、汴京に囚われの身となっていた時、「虞美人」という歌調にあわせて作った詞の前段の首句がそれであ